Newsletter

2016 | 秋 |

特定非営利活動法人ジェン
Vol.66

JEN
Japan Emergency NGO

みんなでつくる明日。

私たちが出会う人たちは
どんなに厳しい状況にあっても、
家族を想い、子どもの未来を考え
一日も早く日常を取り戻すために
前を向いて歩んでいこうとしています。

JENは、少しのきっかけや
小さなチャレンジを用意し、
人びとの自立への
はじめの一歩を支えます。

特定非営利活動法人 JEN Newsletter Vol.66 2016年11月20日発行

ミモザ・トーク
mimosa TALK

Talk for Peace,
Action with Smile

vol.02
誰かのためを思うことが、第一歩になります。

今回のミモザ・トークは、品川女子学院校長の漆紫穂子さん。「28プロジェクト～28歳になったときに社会で活躍する女性の育成」など、ユニークで革新的な教育を推進し続けていらっしゃいます。『教育』のもつ力とその重要性をお聞きしました。

木山　本日はどうぞよろしくお願いいたします。早速ですが、貴校は、起業体験の授業を行うなど、国際的に活躍できるグローバル・リーダーの育成を目指した教育を行う女子中高一貫校としても有名です。人道支援が必要とされる地域でも、読み書きそろばんといった基礎教育だけでなく、リーダーの育成がとても重要だと常々考えているので、今日はヒントを頂ければ、と思っております。そこでまず、貴校でどのような教育をされているのか教えて頂けますか。

漆　「リーダー」と聞くと、どうしても「特別な人がリーダーになるんだ」って、みんな考えがちだと思うんです。でも、本当はそうじゃない。一人ひとり違う能力を持っていますし、弱いからこそ手伝ってもらえたり、力が無くても「何かみんなの為にやってみようかな」という気持ちさえあれば、リーダーになれる。生徒たちにも、そこをまず、身に付けてもらいたいと思っています。また、本校では行事などを子どもたち自身にチームで運営させるんですよ。「失敗する」、「諦めないでもう一度やる」という体験も大切ですし、もう一つの学びが、必ずチーム内で起きる「もめ事」なんです。皆で協力してみると意見が合わない子がいる、じゃあどうするか…、そうやって自分で体得していく。

木山　もめ事を解決する経験をすると、大きく成長するでしょうね。貴校の特色の一つである、起業体験プログラムについても教えて下さい。

漆　そうですね、これは高等部１・２年生が取り組む学習プログラムで、５カ月の間、クラスごとに起業に取り組んでいます。苦節十数年になりますが、今ではNPOモデルのものや、BtoBtoCの様なモデルまで、様々なパターンがでてきています。中には、このプログラムが終わって、在学中に自分で起業する子もいます。

木山　実際に動くことから学ぶ機会を持てる、というところに魅力がありますね。

漆　今年、swatchを生み出したスイス人起業家のエルマーモックさんに講演に来ていただきました。ある生徒の「どうやったら、起業家になれますか？」という質問に、彼は「起業家は目指してはいけません。それは、世の中に贈り物をした人が後から呼ばれる名称です」とおっしゃいました。とても共感できました。

木山　生徒さんたちは本質的な学びをされていますね。

漆　生徒たちには、「もともと何を解決するためなのか、という考えがないと起業しても途中で嫌になってしまうよ」と言っています。誰かのために、小さな問題を見つけて、まず自分で一歩を踏み出し、まわりに協力してもらってそれを解決するという習慣づけをするように話しています。最初は大変でも、苦労した結果みんなに喜ばれることの幸せや成長を感じて、生徒たちは日々成長しています。

木山　適切な目的を持つことは、本当に重要ですね。敢えて大きな言葉を使うと「志」と呼んでよいと思います。やり方は、ＪＥＮの行う自立支援と同じだと思いました。ＪＥＮでも自立とは、課題を見つけて、周りをまきこみ、解決していく力を回復することと定義しています。志を持って誰かと力を合わせて困難を乗り越える体験は、一生の宝になりますね。

漆　人のためになったら嬉しいという気持ちは、みんなの心の中にはあるのですね。プロセスは大変でもそれを乗り越えた時の達成感や成長、周りの人に喜ばれる経験を、若いときに味わう事が人道支援においても大切かもしれませんね。

対談の続きはWEBで！
http://www.jen-npo.org/mimosatalk

TALK with

漆 紫穂子（うるし しほこ）

品川女子学院6代目校長。
早稲田大学国語国文学専攻科修了。2006年より現職。教育再生実行会議委員（内閣官房）。同校は平成26年度よりスーパーグローバルハイスクール指定校。「28歳になったときに社会で活躍する女性の育成」を教育の柱に社会と子どもを繋ぐ学校作りを実践している。著書『伸びる子の育て方』（ダイヤモンド社）など。

皆さまからのご寄付は、寄付金控除の対象です。
最大で約40%が所得税の税額控除となります。

※控除額は寄付金額や年間所得額によって異なります。詳しくはホームページをご覧ください。

生きるちから マンスリーサポーター
あなたの毎月の支援で、世界の人びとの、生きる力をサポートします。

郵便局から
00170-2-538657
口座名 **JEN**

遺贈寄付
ご自身の財産や大切な方の遺産を、JENが支援する世界中の人たちへ、確実にお届けします。

インターネットから
クレジットカードでご寄付いただけます。
（VISA、MASTER、JCB、AMEX）

本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載は固くお断りいたします。

JEN
Japan Emergency NGO

特定非営利活動法人ジェン（JEN）
東京本部事務局

〒162-0824 東京都新宿区揚場町2-16 第二東文堂ビル7F
TEL：03-5225-9352　FAX：03-5225-9357

ホームページ
http://www.jen-npo.org

NPO JEN　検索

IN TRANSIT

ザータリ難民キャンプから
お送りする
JENのメディア・プロジェクト。
雑誌「THE ROAD」に続く第2弾が
スタートしました。

ヨルダン

メンバーは、難民キャンプに暮らす人びとの生の声に耳を傾け、映像化します。

シリア難民が作る映像を世界に発信

「紛争が終わってシリアに帰ったら、ジャーナリストとして映像で復興状況を世界に伝えたい」そう意気込むのは、難民一人ひとりのストーリーを、難民自身の手によって映像化するプロジェクト『IN TRANSIT（イン・トランジット）』に参加するムハンマド・シャワムラさんです。

ザータリ難民キャンプ開設から5年が経ちました。開設当初、広大な大地に数千人がひっそりと仮設テントで暮らしていたこのキャンプは、今では約8万人※ものシリア難民が暮らしています。区画整理された土地に仮設住宅が整然と建ち並び、学校や病院、スーパーが建設され、大通りには商店がずらりと軒を連ねる小さな『都市』になりました。この都市の元気の源は、人口の半数以上を占める17歳以下の若者と子どもたちです。日本の子どもたちと同じように、その多くは学校に通い、放課後には友達と遊びます。また、毎日宿題に追われ、週末のスポーツイベントは楽しみの一つです。しかし、大きく異なることがあります。それは将来への希望をもつことが難しい、ということです。どれほど一生懸命に学んだとしても、ここには知識を実践に移す場がありません。商店のお手伝いなどの仕事はありますが、数と職種が著しく限られています。このような状況にある若者に、夢や将来役に立つスキルを持って欲しいという願いから、JENは2年前に、難民の若者による雑誌制作を始めました。この活動を軸に『メディア・プロジェクト』と位置づけ、今年から映像制作も開始し、メディア媒体の制作・編集技術を習得するための機会を提供しています。

今年5月にスタートした『IN TRANSIT』に参加する15～25歳の男女7人は、ジャーナリストやカメラマンになりたいという夢を持ち、難民一人ひとりの日常生活を世界に伝えることを目指しています。チームのほぼ全員が映像づくりは初めて、という状態からスタートしましたが、映像制作のプロによる指導の元、今ではテーマ選定から編集まで、すべてのプロセスを自身で行えるようになりました。例えば、シャワムラさんが担当した映像。学校の隣の雑貨店は、児童労働がテーマです。家族を養うために学校をやめ、雑貨店で働く少年の日常を追いました。出演依頼の交渉から事前取材を経て、昼夜を問わず何日も撮影を続けました。膨大な量の編集作業には更に数日を要し、短編映像が完成する頃には数週間が過ぎていました。製作チームをまとめるチームリーダーでもあるシャワムラさんは、「シリア難民の生の声と、姿を世界に届けることができて嬉しい。リーダーとしてチームを拡大し、良い映像を作り続けたい」と希望を語ってくれました。

JENは、今後も若者が夢をもつ機会を、そして夢を追い続けられる環境を提供し、将来、彼らが母国シリアに戻った時には、夢をかなえた若者が、ジャーナリズムを通じて復興の中心を担っていることを願っています。これまでに映像に出演したシリア難民は11人。ストーリーは難民キャンプに暮らす人の数だけあります。『IN TRANSIT』を通じて、一人ひとりの「ふつうの暮らし」を世界に発信し続け、見る側の人びとにとって自分ごとになる日がくることを目指しています。

※出典…UNHCR 2016年10月時点

（上）どの様な構成にするか、経験豊かなスタッフとともに考えます。（左）ほとんどのメンバーがカメラを扱うことは初めてでした。

これまでに完成した作品の中から、2つの短編映像をご紹介します。

STORY

マーク・オブ・ホープ

ザータリ難民キャンプで暮らすハムザさんは、生まれつき足が不自由です。シリアでは外見で差別を受けることもあり、人との交流を避けてきました。しかし、紛争で大親友を亡くし、キャンプへ避難してきたことをきっかけに、生き方を大きく変えました。これは、自分の殻を破り、今やキャンプで有名人となった彼と障がいを持つ子どもたちの劇団のお話です。

フェリーダさん（27歳）

プロジェクトを通じて得た、人との出会い。

「INTRANSIT」で、初めて映像制作に携わりました。仕事をしながら参加しているので大変なこともありますが、出来上がった映像を褒められた時の気分は格別です。ハムザさんに出会い、彼のストーリーを追ってみたいとお願いすると彼は快諾してくれました。たくさんの人に出会えるこのプロジェクトが大好きです。

STORY

砂漠に咲いた花

4年前からザータリ難民キャンプで暮らすアブドゥル君はある日、「キャンプには色がない。ここに色があったら良いかもしれない」と思い立ち行動を起こします。家族が暮らすプレハブの家に小さな「庭」を作り、ここでの暮らしに少しの彩りを添えたのです。そして、紛争によって亡くなった兄が大好きだった白いカーネーションを育て、兄を懐かしく思います。

ユヌスさん（20歳）

難民キャンプの今を伝えたい。

僕は元々、映像を作ることが好きでシリアではカメラに触ったこともありました。このプロジェクトで学ぶ事は多く、映像制作のスキルが上達していくのを実感しています。編集作業はまだまだ難しいですね。もっと上手くなりたいです。将来は世界中の難民キャンプの今を伝えられるジャーナリストになりたい、と願っています。

最新の動画は
WEBでご覧いただけます！

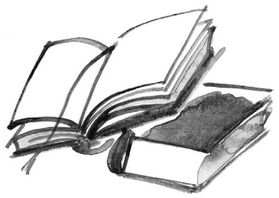
日本語
www.jen-npo.org

英語
zaatari-media.org

若者の夢を支えたい。
シリア難民支援への寄付にご協力ください。

郵便局から、郵便振替で。
○郵便振替口座 00170-2-538657　○口座名 JEN

インターネットから、クレジットカードで。
○www.jen-npo.org　○VISA、MASTER、JCB、AMEX



一人ひとりのストーリー

紛争や自然災害は、突然私たちの暮らしを一変させます。
家族を失うかもしれません。避難民となった人びとは生きがいだった仕事を捨て、
安全という噂を頼りに見知らぬ土地へ避難することもあるでしょう。
そんな厳しい状況下でも、前を向いて歩いている人びとのストーリーをお届けします。

アフガニスタン
カティラさんのストーリー

学校生活は、新しい世界との出会い

JENが修復した学校に通うカティラ。彼女は学級委員をつとめています。

JENは、パルワン県チャリカ地区で、学校修復や水と衛生環境の整備を通した教育支援を行っています。そのうちのひとつ、女子学校の3年生のクラスで学ぶ10歳のカティラは、2015年、家族とともに避難先だったイランから9年ぶりに故郷に戻りました。イランでは学校に通えず、父親から勉強を教えてもらっていました。

「学校に通いはじめるまで、私の生活は家事を手伝うことが中心でした。兄弟や両親から『新しい学校ができるんだよ』と言われても、何が楽しいのか、想像がつきませんでした。ところが学校生活は、まるで新しい世界との出会いです。将来の夢や、たくさんの希望ができました。今では、このあたりで一番きれいな私の学校が自慢です。先生は、私たちに災害や防災、健康について教えてくれます。昨日の夕方、お母さんから『日なたの水を使ってもいいかしら?』と聞かれた私は、『ふたをしていた水であれば、安全です』と答えました。

JENが修復している校舎には、教室が6部屋できると聞いています。もっとたくさんの教室があれば、もっと多くの児童が学べると思います。新しい校舎が完成したら、きれいな花をたくさん植えたいです。私がそうだったように、世界中の子どもたちが学校に通えるようになりますように」。

パキスタン
ヌアさんのストーリー

もう一度、農業をはじめるために

ヌアさんと彼のトウモロコシ畑。今年は沢山収穫ができました。

2009年以降続いた武装勢力掃討作戦により、10万世帯以上※1が連邦直轄部族地域南ワジリスタン管区から国内の安全な地域に避難しました。2010年より、政府による帰還事業が始まり、これまでに3万世帯以上※2が故郷に帰還しました。南ワジリスタン管区の主産業は農業ですが、大半は小規模農家で、自給自足を行うのがやっとです。避難生活を送った7年間、農地は放棄され大雨や洪水により灌漑施設は壊れ、大切に保管されていた種子もなくなってしまいました。

JENは、故郷に戻った帰還民へ農業支援を行い、持続可能な農業の再開を目指しています。事業参加者の一人、ヌアさんは、JENからトウモロコシなどの野菜の種と農機具を受け取ったのち、農業研修を受けました。彼は受け取った種を蒔き、彼のお母さんと奥さんとともに、畑の手入れを行っています。ヌアさんは言います。「これからは年間を通して耕作できればと思います。作物が育てば家族で食べ、豊作だったら市場で売り、その収入で子どもたちを学校に通わせる予定です。家族の医療費を支払うこともできるでしょう。種は次の年に畑に植えることができます。こうしてやっと、安心して家族を養えるようになるのです」。

出典 ※1 Protection Cluster/IVAP合同調査/2016年7月時点 ※2 UNOCHA/2016年10月時点

スリランカ
タヴァマラルさんのストーリー

残された子どもたちのために心に決めたこと

辛い過去を乗り越えて今を一生懸命生きるタヴァマラルさんと子どもたち。

私は、北部キリノッチ県タンバハマムに住むタヴァマラルといいます。亡くなった妹夫妻の2人の子どもと2人の親戚と暮らしています。

私がここを追われたのは2006年のことでした。当時、北部での戦闘が一段と激しくなり、私たち一家はとうとう避難を余儀なくされました。近くに暮らしていた親類のもとに身を寄せましたが、そこも2009年の終戦まで激しい戦闘が続いたため、たった3年の間に10回以上も避難しました。2人の息子と妹夫妻を亡くしたのはその時です。息子の1人は当時まだ10歳でした。

内戦終結から6年後の2015年、私たちは、ようやく故郷にもどることができました。ところが、故郷の大地は内戦の間に荒れ果て、ゼロからのスタートになりました。

最近になって住居の再建や農業の再開が進められ、ようやく地域に活気が戻り始めました。これからは、内戦前の農業の経験とJENの農業支援を活かして、農業で生計を支えてゆきたいです。バナナやココナッツなどを大きく育てて収穫するのが、今から楽しみです。

私の生き甲斐は、子どもたちが健康にたくましく成長することです。そのためにも、まずは、農業を再開し育んでゆきたいです。

イラク
スワリさんのストーリー

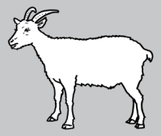
若き衛生プロモーターの大活躍

写真左がスワリさん。衛生促進活動用のプレハブ建設予定地の前で。

武装勢力の攻撃により、国内全土に330万人以上の国内避難民が発生しています。JENは北部クルド人自治区内に設置された避難民キャンプで、水と衛生施設の環境整備を行っています。ここでJENの活動にボランティアとして参加しているコミュニティ衛生プロモーターのチームリーダー、スワリさんをご紹介します。

中学3年生のスワリさんは、将来、弁護士か医者になることを夢みています。キャンプに避難した2年前から、コミュニティ衛生プロモーターとして主に衛生キットの配布、衛生に関する知識の普及などを行い、衛生施設の整備にもボランティアとして携わっています。彼のチームは去年10月、「世界手洗いの日」のイベントで手の洗い方やトイレの利用方法などを生徒たちに教えました。楽しみながら学んだ知識で、去年イラク国内で流行ったコレラなど水因性の感染症をこれからは未然に防ぐ一助になることを願っています。

JENは、スワリさんのような衛生プロモーターが会議を行い、意見を交換し、イベントの準備をするためのスペースを設置する予定です。これまで以上に、プロモーターたちが、活き活きとキャンプ内の衛生環境の整備に活躍してくれることを期待しています。



生きるちから マンスリーサポーター

1

ご参加はホームページから。
www.jen-npo.org/monthly/

2

月々の定額をご指定ください(月々1,500円から)。
ご寄付はクレジットカード決済※1または金融口座引き落とし※2をお選びいただけます。

3

翌月からも、定額の寄付を毎月引き落としで継続いただけます。

例えばこんなことができます。

月々1,500円 ×1年
アフガニスタンの生徒36人に衛生キット(せっけん、タオルなど)を配布。

月々2,000円 ×1年
イラクの避難民276人に石けん2個と洗剤を配布。

月々3,000円 ×1年
パキスタンの帰還民120人に、農業研修を実施。

月々5,000円 ×1年
スリランカの12家族に野菜の種と農具一式を配布。

www.jen-npo.org

JEN マンスリーサポーター 検索

＊1 国際ブランド(VISA、MASTER、JCB、AMERICAN EXPRESS)のいずれかのロゴがついていれば、発行しているカード会社に関係なく、ご利用いただけます。 ＊2 ホームページからお申込書をダウンロードいただき、印刷・ご記入の上右記の住所までご郵送ください。 〒162-0824 東京都新宿区揚場町2-16 第二東文堂ビル7F 特定非営利活動法人ジェン(JEN)東京本部事務局 [お問い合わせ]03-5225-9352

イラク　コラム

緊急支援の最前線を行く

日々変化するニーズに対応するということ

２００３年にイラクの紛争が終結し、ＪＥＮは首都バグダッドで緊急人道支援を開始しました。私たちがいつも大切にしている事、それはもっとも支援が届きにくい場所、もっとも社会的に弱い人びとに対して支援を行うことです。活動開始から12年、イラクの一部の地域では復興の機運が高まっていますが、未だに治安が不安定で紛争が続いている場所もあります。

そこでＪＥＮは、２０１４年にはバグダッドに加え北部クルド人自治区にも活動拠点を開設しました。武装勢力から逃れた人びとは、シンジャール山やシリアとの国境近くに設置されたいくつかの国内避難民キャンプに避難しています。ＪＥＮは、これら避難民に対して生活にもっとも大事な水や衛生環境の整備などの緊急支援を行っています。特に周辺地域が武装勢力の支配下に置かれていたシンジャール山には、現在も約１０００世帯が避難しているため、複雑な状況下での人道支援に経験豊富な国際ＮＧＯの活動が求められていました。ＪＥＮは、１９９４年に旧ユーゴスラビア各地での緊急難民支援を行って以来、イラク（２００３年～）やアフガニスタン（２００１年～）、レバノン（２００６年）を含め世界各地の紛争地域で緊急人道支援を行ってきました。そうした経験を国連や国際機関、欧米のＮＧＯなどから認められ、緊急事態に即応できるＮＧＯとして活動することができています。

今、イラクでは、モスルでの戦闘が激化し市民は避難生活を余儀なくされています。ＪＥＮは日々変化するニーズに対応しながら、避難民への緊急支援や、その後の復興が速やかに進むように、活動を続けてゆきます。（文：シリル・カッパイ／グローバル事業部・部長）

（左）破壊しつくされたシンジャールの街。紛争前はとても綺麗な街並みだったという。（右）JENが水の供給を行うシンジャール山の麓。1日2回、タンクに水を供給している。　写真：シリル・カッパイ

JEN EVENT CALENDAR

2016年12月5日（月）

イラクの今
人道支援の最前線レポート

情勢が変化し続けるイラク。帰国直後のスタッフが取り巻く環境からJENの活動まで、わかりやすくお伝えします。

www.jen-npo.org/20161205/

2016年12月17日（土）

サポーター
オリエンテーション

JENでボランティア活動に初めて参加される方のために、JENの活動を詳しくご紹介します。

www.jen-npo.org/

年末大そうじ キャンペーン

そろそろ2016年も終わりに近づき、大そうじの季節がやってきますね。
おうちをスッキリ片付けながら、寄付にも参加しませんか。

BOOK MAGIC ブックマジック

本、CD、DVDをダンボールに詰めるだけで、日本全国送料無料でお引き取り。その買取額がJENのアフガニスタン、イラク、シリア難民支援などの教育支援事業に役立てられます。

www.jen-npo.org/bookmagic/

KIFLMA キフリマ

「キフリマ」は、“寄付”と“フリーマーケット”を組み合わせた言葉。JEN指定のフリーマーケットに参加し、その売り上げをJENへご寄付ください。月に1回ベースで参加者を募集します。

www.jen-npo.org/kiflma

お宝エイド

携帯電話・スマホ、金券や未使用切手、貨幣やカメラなどお家に眠る「お宝」を買い取ります。シリア難民やアフガニスタン、イラクなどで教育支援や生計回復支援に役立てられます。

www.jen-npo.org/otakara-eido/

2016秋号限定
お宝エイド専用封筒つき！
「お宝」を封入の上、そのままポストへ投函できます。

※お宝エイド以外のプログラムにはご使用いただけません。

活動報告

東北

女性たちのネットワーク力で地域の活性化を

震災から5年、第2フェーズに入った東北3県での活動は、少しずつ軌道に乗り始めています。パートナー団体のひとつ、ウィメンズアイは8月、岩手県、宮城県、福島県を拠点に活躍する女性の連携強化とエンパワメントを目的とした研修会、『グラスルーツ・アカデミー』を開催しました。

参加者は17人の女性たちで、震災をきっかけとして、地元の農作物を使った商品開発や子育て支援、子ども視点の防災教育など、柔軟な発想で新しい取り組みをされて来た皆さんです。ＪＥＮは、ウィメンズアイとともにこのプログラムの策定から実施までを行っています。

研修会ではまず、参加者一人ひとりが抱える様々な課題を共有しました。たとえば女性の活躍の場が少ないこと、結婚・出産・子育てなど目まぐるしく変わる女性の生活が、組織運営や持続的な活動を難しくしている、などです。次に、各自が持つ知識やスキルを課題解決に活用するための具体案について話し合いました。研修を通して、ひとりでは行き詰ってしまうことも、ネットワークを活用すれば解決できるという自信やモチベーションを取り戻すことができた、という嬉しい効果につながりました。

参加した大学生からもらった「講演や活字を通してでは出会う事のできない、リアルな大人の姿を知ることができてとても勉強になった」という言葉が印象的でした。確かに、講演などを通して出会う大人の姿は『成功』の部分にフォーカスされ、その裏にある、日々の困難や努力が伝わらないこともあります。だからこそ、より良い社会のために活動する女性のありのままの姿を引き出し、努力に寄り添うこのプログラムは、彼女たちを支えるだけでなく、一歩を踏み出そうとするすべての人びとの背中もそっと押しているように感じました。

彼女たちの熱気に満ちた研修は3日間にわたり続きました。（写真提供：ウィメンズアイ 撮影：古里 裕美）

JENインターン 猿田幸絵

熊本

がれき撤去の継続と、若者たちを後押しする新たな活動のはじまり

熊本地震の被災地では、8月時点で、約１０００名が避難所での生活を余儀なくされていました。※ＪＥＮは、がれき撤去のサポートを行いつつ、これから始まる復興の主役となる地元の方々の後押しとなる支援活動を始めました。

益城町と阿蘇市の活動では、地域住民と地元のボランティア団体が行っているがれき撤去を支援させていただいています。約一万戸の家屋が被害を受けた益城町では、地元コミュニティのリーダーを通じて資材の提供を、約２０００戸の家屋が被害を受けた阿蘇市では、地元ＮＰＯを通じて車両と重機の貸し出しを行い、倒壊の危険性が高いにもかかわらず、公費解体の対象とならない家屋の解体とがれきの撤去に使用して頂いています。

9月からは、新たな支援活動がスタートしました。被災地では、震災から半年以上経った今も、地域の人たちが中心となって絶え間のない復興への歩みが続けられています。その一方で、時間の経過とともに、長期的な取り組みを必要とする地域の課題が顕在化してきています。そこで、ＪＥＮは、課題のうちの「担い手不足」解決に取り組み始めました。ＪＥＮは地元の若者の創造的な復興に向けた取り組みを後押しするワークショップ型復興支援、「明日のくまもと塾」を始めました。この塾の参加者は、熊本内外の人たちと繋がりながら、社会課題の解決と発展への突破口をみつけ、計画立案から事業化に移すためのスキルを学びます。

熊本地震の被災地では、緊急期は終わったものの、被害の範囲が甚大なため中長期的な視点で行う復興支援活動が必要です。ＪＥＮは、被災された方の心の復興をもたらすために、これからも引き続き熊本復興の一助を担ってゆきます。

※出典：熊本県災害対策本部 平成28（2016）年熊本地震等に係る被害状況について【第164報】

（左）「明日のくまもと塾」のキックオフの日。20名の参加者が集結しました。（右）南阿蘇村にて、JENが貸し出している車両で、土砂の撤去をしている様子。